

青空集

^ 5  
6527





八五  
6527



余亦亦不在一以之勢方能いともおの  
もふもふと福田能月ふ操一もむつ  
か〜ひ〜双葉を庭の海を事たぬゆめ  
操ふおもむく〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
ふ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
は〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
佳き以佛ともむつと世ふ縁き〜世の



010126021601







之謂之何。要之。不過附於過去因緣  
耳。俳諧者。亦不無。亦謂因緣之為  
因緣。與情相隨。哭住節者。延及水  
壺。哭水壺者。亦延及住節。未嘗不  
置因緣於其間。於是乎。滑稽四  
溷矣。滑稽者。俳諧也。其意愈滑。  
其訣愈秘。遠近相寄。竟成一卷。  
今雙雀庵主人。如白。上之梓。請

序余。之遊。載之錄。嘗予二子。亦  
而其病也。診之。殺也。序。蓋名出  
於因緣。因不辭其情。序以與之。  
明治四年歲次辛未春三月

中川甘茶識



漫山書





服起之儀

氷壺佛

喜字をその儘に以て初とせ	如
赤くは水も濁るゆへ喜	白
縁つゝ別條の眉よ打かけて	花
以てはやくようとて換掛け	雨
初とのよゆたに成り雪の月	仁
蘭のりもともも雪の初	雙

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 雪、月、初、花、雨、仁、雙]*





高橋の只のゆきも雪しよ

徳子

鹽より稀き蟹は私を

不角

仕つけ替りもしてそ者の袖た

欵壺

遊心の休の飛くよ

霞光

赤造りもまはれど所りき

龜水

釋を酌するの聲の涼よ

榮哉

夏むよの想のなき月の入

丹茶

團扇の芳きを新くは酒

故月

をけきとて告げ竹床に

朱魁

海のものきも又のふりよ

雪麻

吹流の風も清くは花は

文種

まもるる星も人跡も

兆さ

うらみのすの梅は

風月

けりもけりも障子御

其聲

ふれは法ふりなす

昇東

皆碧焼まじゆら

其水



やまにありた噴ききの二の返  
 かきたても牛のけけりく  
 云ふもふひを道てをいひ先  
 化粧きしめて通すをふ  
 茶のまよ入も橋場の川原住ひ  
 木のまよははよ殊異くま  
 名月まよははりの下まよ  
 秋もたしく 松の葉掃露  
 抱中  
 枝川  
 兼史  
 波路  
 琴松女  
 推吟  
 士敬  
 弓守

周静まよははは 旅やろり  
 烟管うすくかき 暮火  
 ちりまよまよあまのい少体  
 織の子まよあ 砂たみまよ  
 としくのたままよいまよ  
 ちりまよまよあまのい少体  
 半谷

半谷  
 尾崎  
 紫梅  
 英粒



猿起

物干ける氷をたぐひ鳥いれ

氷壺佛

炭の薫もつれくの友

渾薬

老ふ反故のけを互に撫ふ

黙池

猪あいらしよ水まぬらふ

薬

とらぬぬ吐のそらも三夜待

池

晴く降るハ何ともちやら

薬

きこ念よ糸の西鏡をまけりち

池

うらも衣を家鴨よけりち

薬

追従よ向まき巻く古扇や

池

吹くまき河をたぐひ

薬

やうも痛むとくくの音南き

池

振るすちちたぐひまもの

薬

うらも舟中道重今月の空

池

成るるも下流を初

薬







とんぼの身下はさきと繩の縁  
儉約れの舞臺、雨と  
隠居するはるかにさき  
何れもさきとさき  
むと人へおまをさき  
并くさきとさきの秋さき

葉池 葉池 葉池 葉池

袖のしほ風はさきとさき  
うれとさきとさき  
のしほ風はさきとさき  
さきとさきとさき  
さきとさきとさき  
さきとさきとさき

如白 華之 裁白 裁白 裁白



一ふなをよゆ田たき給  
玉ふりたる我の隣も見  
陰尺の素をさしやむひの清き  
そよりにこほちし藤のまてこ  
大粒まの雨のかくも暮るき  
あいの風鈴乃雙の梅寺へ  
そよひたる約もさしやむひの清き  
笠簾をけし舟のくさる氣

兄 白 哉 兄 白 哉 兄 白

八重さくもも咲き花の影  
はもあちつと秋先の月  
海苔産卵も新の舟の伐  
四五葉をくみぬくたの  
ゆもさるにや水清き影の  
松もそよくらん舟の影  
よもあちつと秋先の月  
仕つたあまのねをたか

白 哉 兄 白 哉 兄 白 哉



中宿うらなふ方好しとて清し  
糸糸湖風快く一氣吹き交り  
まゝと暮すぬる身はとて是を  
秤とたむ寸糸程甘く  
白紙と陽花くと氣味あり  
茶の湯きし傳りては所明  
月とと汐見え世はとて  
きのふはゆきもちとて

栽 兄 白 栽 兄 白 栽 兄

高き花よりゆき玉きり  
蹴くかきりもよるは  
あつちをきし情もよる  
あつちをきりよるは  
和みよるまきり実生の花  
りあつちをきり

栽 兄 白 栽 兄 白 栽 兄



何れも静かに流るる水に  
さあおのまゝゆるる庭先の烟  
地をに曳きたる石を又庭中  
仕てきたを駕よまらぬと宗  
月とけのなを氣に宵のたけ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

如白  
暮  
白  
白  
白  
白  
白

高きものも寒く斗々の物  
を度り使ひたつてのまじし  
流る水の来り出始を  
温氣を拂ふよを香を  
空原よりく水鶴もあそび  
さくらよ入は乃法を  
遠くから遠くまで  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

白  
白  
白  
白  
白  
白  
白







うしよの氣先子賞人 實市

ちよる殿とていふ理を志すけ

よよなきといふ故に何さる歌心と

世を葉子の影し 四のきよとて

て今を解もくも世はたり

けらりと旬のかけはにけり

賦

白

賦

白

賦

白

以てなるはほし 庭はつるはも

空をけし 是の條をさる物

高の塔さきいふ 水は信別と

竹のをもく戸の外にむかひ

月影に 移るは月のねる櫓

羽をたもまきゆきほり

文 程

如 白

程 白

白 程

程 白

白 程

士



濁酒の樽姫さき佳し成し色  
とて侍の代酒名常  
縁のまねら人のまねはし  
樽の粉の汗まふか  
結ねらよの磨の約よ  
よまくさくはゆのゆ力  
秋の月ふらふまねく小豆飯  
ふらふの粉ねらゆのゆ力

白種 白種 白種 白種 白種 白種

きくもきくもさき佳し成し色  
ふらふの粉ねらゆのゆ力  
秋の月ふらふまねく小豆飯  
ふらふの粉ねらゆのゆ力  
縁のまねら人のまねはし  
樽の粉の汗まふか  
結ねらよの磨の約よ  
よまくさくはゆのゆ力  
秋の月ふらふまねく小豆飯  
ふらふの粉ねらゆのゆ力

白種 白種 白種 白種 白種 白種



たは雪を奪つ仲るの行はる  
うし袖はく海にまよふ花  
うかりし魚を小猫をまねて  
しんげりしらの高のくはり  
舟の浮汐よきつる移りす水  
磯辺の宮々仔細のん尻  
揺ららるる月もたふし  
家なきうらに舟の枯を

白 種 白 種 白 種 白 種

旭吹くうらて土旭の行はる  
守りもつら終るおのりあら  
うし我をほろけりあきり  
うし形もそなくきりまを  
ちん中よおれそ花の咲かす  
はくくも開よかすも

白 種 白 種 白 種 白 種



只一羽ふくやあらの解の何と 如白

降よまねくそこのまの花 春湖

坊々傳子明く菘菜ふし 弊史

清いあつかりたるもよ頂 白

枝豆をけちく月分なきけさて 湖

流掃くく 順くく積 史

出水くそをく科くそのま 白

碑をよふそをくやうとそく 湖

料理をいあねをそやとそく 史

妻のつとをくくはく人言のそ 白

海をのつとをくくはくそ 湖

暑のつとをくく居つてのほし 史

かいまをくそをく水子一と桶 白

かゝの掃娘よとろくつす 湖



春天よ春遊もがけしけり  
そ逢ふたれらる花のま  
うらさきのほかたけの金  
ちんくそやそんくは去付  
ゆらりと切さし身は終りき  
舟のわたりる水の上を  
若春山の糸はききけり  
けりてわたりし連のち

史 白 湖 史 白 史 白 湖 史 白

空しくも春の憶せぬ者  
難よけけりる美しき人  
才くてもあはれを捨てて  
けりる春の影の入りきり  
大勢の中をいさぐ畑を  
あはれもはれはれの子  
度いほむるも愛おの月  
かき素静は杉の葉の

史 白 湖 史 白 湖 史 白 湖 史 白



氣のたぬまの連漣の秋の成  
 るそつねらるるさうくくさる白  
 傘の結も出で候めり向くところ  
 多しとる時神く夏腐る声  
 滝のりよ花はくくも九折  
 けしらのぬきくくくぬ暖く

白史 白史 白史 白史

己十月八日きりり悼吟三首

各首文略  
 けしらのぬきくくくぬ暖く  
 傘の結も出で候めり向くところ  
 多しとる時神く夏腐る声  
 滝のりよ花はくくも九折  
 けしらのぬきくくくぬ暖く  
 けしらのぬきくくくぬ暖く  
 けしらのぬきくくくぬ暖く  
 けしらのぬきくくくぬ暖く  
 けしらのぬきくくくぬ暖く  
 けしらのぬきくくくぬ暖く

華兄 欽壺 不角 徳子 琴和女 仙月



色意もも妻もあまの川  
日の入の影をよまもよまも  
西のそよよ上る影や神は  
なまよよ風の物うらささ  
耳さきく初あまの川  
名もよもや時あまの川  
香々せよにせぬ記憶も枯草

春湖  
文昇  
模能  
抱中  
正何  
霞光  
耳茶

ちよまもも名もあまの川  
紫の中よまよまよ  
後よまよもに帰るあまの川  
名もあまの川  
しよまもも名もあまの川  
日よまもも名もあまの川  
あまの川  
早あまの川  
あまの川

等裁  
陽所  
龜水  
枝川  
紫梅  
昇東  
弄水  
早つち  
波路



定のよやーしちむひまの生能き

左系

葵史

旅先や 仮のしを夜も冬を鏡り

麗采

若くは葉のまにに朝のぬき水

尾喉

朝の世の定よ是よりよめ帰

旅碎

春まの風よりしるはと春より

六兩

旅のよやーしちむひまの生能き

六

十一のねとてはるり八月月

為西

旅のよやーしちむひまの生能き

六

くまのつてたきよのよきしれ

西系

芥金

くまのつてたきよのよきしれ

惡池

旅のよやーしちむひまの生能き

良大

春まの風よりしるはと春より

逢梅

くまのつてたきよのよきしれ

漢葉

よきよのつてたきよのよきしれ

甲

香芸

花のつてたきよのよきしれ

九江

春まの風よりしるはと春より

スハ

舌麻



新の身に衣の白く志度さ  
土浦 和巻

雨のぬち地をえりし  
晴河

告りて潤り水底中へ  
相江

名よき柳のたぐり  
尺水

松のよの枝の垣根  
豊岳

志新水  
士敬

阿もきねや  
推吟

吹送る新の終り  
連水

江のれ鳥といふ  
梅文

楯のすすき  
赤成

枯るる海  
知恭

思ふき日  
琴松

幸天の我度  
酒山

敬て尚名の志  
文種

月影をうらむ  
栢木 菜欣



三十一 白と根の心愛ゆかぬや ヤナ川 菜史  
 中へ流りけり屋も多ク見て冬籠 ほつ川 御風  
 冬やきき袖のしほけり日小歳友 三春 兆左  
 うさよふしき海乃りまきい 交精  
 うしとねふしき座まふんこれ 柳壺  
 もきねと又んそ時あまひり 又二  
 さゆふきそやうぬ時白ゆか袖 壯氏  
 梅きこて為くとも心の定まきい 風志  
 雪ふけてらふはるもい山家これ 歌裁

又きこたきしよあより移り定まきい 好後 江春  
 阿曇もよこれいれいれい まゐり 花 馬了  
 侍りうらふあそけり 鐘 素山  
 炭乃きも月すもふり 志 天童 静風  
 うさよふしきやもさく水のうさ 文窓  
 月さのぬくやまきくゆふ山 芦川  
 雪さけのこしてうら川大根代 雪窓







おきゆる帯や袖のゆるむと

葉粒

たふけいよ花もがきはもさく

すけ女

りのきよあつとさけいひ時雨うれ

仙之助

きよのたのこ甲斐なるもち梅と佳音の遠く

水さけいひゆるもさくは病の床より燃え

かもしも時をさくは梅と雨き三伏の暑も

うらの影を賞うはけいひ秋の涼もさく

毛さきうらあきも少なき梅の香もさく

はきもさくはけいひ日る梅はくさく

しもさくはけいひ花のちさくはけいひ

あいのいさくはけいひ時雨うれ月つかりはけいひ

不退のそ速きうはけいひ梅の霊もさく

退牌の吟をゆへるもさく

あまのりや月のしきくさくさく

如白

おきゆる

おきゆる

おきゆる



四季詠

佳名の次方ふ角々

先人好まざる成乞

晴るるり 終る 沈き 暮る 秋の月 西京 九起  
 きのわんてくふ定くぬきし好る電 淡良  
 川 鳴く してよ 舞の 故 香 芬 文海  
 あきうけく 涼も 花の けしめしれ 拾山  
 又あきぬき 秋風 入 男 初 秋 若 三節

ささげの ちのめく ちのめく ちのめく 潮水  
 やしねの ちのめく ちのめく ちのめく 宇尺  
 一里 東て 見く ちのめく ちのめく 南 齡  
 伊勢 海も や 秋の ちのめく ちのめく 杜 嶋  
 昼も ちのめく ちのめく ちのめく 影 高  
 明く ちのめく ちのめく ちのめく 松 隣  
 高 極 や 嵐も ちのめく ちのめく 朝 邊  
 加し 梅雨 や 庭の ちのめく ちのめく 水 塔  
 陰る ちのめく ちのめく ちのめく 眉 年







船はひらくと妙なき等  
 去るもくち移るもや月の香  
 持てたつるも妙なき  
 清くも胸のこもよるも秋  
 鳥をよも人もんを日ならぬ  
 ねもよも只胸もや一月も梅  
 百舌もやや小坂のうら一喜も  
 春の夜もたもよも袖の鼓  
 梅もよもなれも修も少もよれ

流翠  
 碎雨  
 華岳  
 南  
 奈水  
 春碧  
 而遊  
 素溪  
 清美

春の夜もたもよも袖の鼓  
 梅もよもなれも修も少もよれ  
 ねもよも只胸もや一月も梅  
 百舌もやや小坂のうら一喜も  
 鳥をよも人もんを日ならぬ  
 清くも胸のこもよるも秋  
 持てたつるも妙なき  
 去るもくち移るもや月の香  
 船はひらくと妙なき等

晴園  
 素陽  
 共前  
 其怨  
 洗我  
 果樵  
 續重



麦房をりのふりく、鳴子をり成乙也

海亀をりのけし、山家をりの山士

初秋をりや、手待をりの、麻ねをりの、落牛

よき、掃をり、煤をりも、不をりめ、日をり和をりれ、竹をり、莖

空をりの、人をりの、く、こ、か、通をり、る、花をり、位、徳、龍をり、湖

湖をり、越をり、の、一をり、里をり、の、を、り、く、先をり、の、花をり、省をり、秋

葉をり、の、子をり、より、淋をり、し、野をり、に、ま、白をり、の、く、木をり、休

う、く、返をり、の、浅をり、流をり、板をり、や、舞をり、を、蝶をり、其、残

秋をり、の、野をり、高をり、如をり、す、竹をり、下をり、も、く、り、り、精をり、知

ハ、翔をり、や、鼓をり、子をり、よ、以をり、く、と、舞をり、扇をり、子をり、風をり、葉

雪をり、ち、も、花をり、の、明をり、く、移をり、つ、る、意をり、の、外をり、尼、採をり、花

く、く、枝をり、や、ま、ま、ま、は、く、よ、は、く、ま、ま、雪をり、磨

雪をり、を、枯をり、て、あ、の、お、あ、り、日をり、和をり、ふ、之、何、蓬をり、宇

秋をり、寒をり、く、や、川をり、の、水をり、を、て、若をり、あ、り、し、之、雁をり、峰

燈をり、け、け、も、家をり、ま、あ、く、く、少をり、木をり、能をり、半をり、仙



清し眼よもみりて雲一せぬらひ

秋夕

八月やそらに大い波のつうけり

云之

短髪よめもこのちもむくれは

波文

真の菊もくちあふ念い老るる

半挂

ら甲の板や軽きしらぬ標儀

杜老

何れも大いなる水

杜老

何れも大いなる水

杜老

とんちねわくも 枘りし菊や

三奏

根をぬりしちりてはあふも葉は

其谷

高きとたけ晴しとこれの大井川

十湖

ちりねねおしりしこの美しき

杜水

夏腐る一切のまきしる室を

守考

去り魚や美しきわくわく相付

園知

六月や夜明けのゆるり

古人

築垣のまきしる在るのまき

水吉

何れもむすむすも 藤原のれ

木洞

早もく伝ふる 結物もや夕侍

尾正



大家の間の山あや 祈の花

嵐牙

つるし歩けり雨も名残や夕栞

強ら

尋香

河ふや井よも室よ汲まら

古年

流るやそよ風は秋の月

青溪

旅人かき跡鳴りて初きそら

喝堂

つるしつゝぬきや去てあゝ州の峰

補石

船をこゝおのりまきや那の柳

九成

雪ふふの船も娘も更衣

雪唐

はやくと室のうつくや花高蒲

九如

鳴るそきくさひしや若のうら新

清高

氷ぬい管へけつゝそ花の朝

似水

鳴るあねややうらぬの待まらけ

甲斐

可轉

鳴るうら鳴や流生乃 鶴の聲

竹良

よつう雨もなきて跡もなれさく

不筆

阿ふもそやうら若らそむ杜あ

通孝

月うけそアそそあそそと初梅

一陽

一



明神のやまやふすまのこを

子園

とつとつあきつて浮陸のや

秀助

川あけて海におちるや鳴るは

お極

子紹

友のちまをさるやういふき

一称

こころおやをいへるは長火

子巴

つらやう鴨をまの池の鳥

以静

ものけ氣のうつら清き炭火

用茶

さく波や雲のゆるりもく

因崎

一橋

正面を花よきもむおたよ

雪松

蓬萊の橋のゆるりもく

橋

古谷

少ねやおのこあねも雪又

河皮

堯年

滝ねらやういみ末の響くれ

左琴

しるしをきえて身水の水の味

石村

あまのこをきえて身水の水の味

石村



葉

連翹也 けしき一き 送文口

出金

曲川

雨よりうれい 柳のきむらひ

方月

あまのうらみ 柳のきむらひ

出金

石友

あまのうらみ 柳のきむらひ

出金

夕居

あまのうらみ 柳のきむらひ

三外

あまのうらみ 柳のきむらひ

翁池

あまのうらみ 柳のきむらひ

曾房

梅の影のけしき 柳のきむらひ

陽斗

梅の影のけしき 柳のきむらひ

洋く

あまのうらみ 柳のきむらひ

出金

香雪

あまのうらみ 柳のきむらひ

出金

他山

あまのうらみ 柳のきむらひ

柳守

あまのうらみ 柳のきむらひ

昔哉

あまのうらみ 柳のきむらひ

画村

三



わろきく何の物も病をさすおのる  
春海

つるくつるくおのる  
下サ  
鉤月

ふらふらふらふら  
上サ  
柏起

奇ききくくく  
孤立

掃行は松枝を折る  
茶風

古笑やあき割るも日あうり  
旭富

ふらふらふらふら  
至清

家へつるのさゆり  
水谷田  
の昇

花をて者  
下毛  
申溪

とととと  
雪山

白梅や松の葉  
茂精

うらやうら  
友松

わくわく  
聲外

おのるの泣き声  
上毛  
琴峯



那月やききゆりゆき水の市  
 乙狐  
 茶古  
 花燈  
 うた  
 筋云  
 等齡  
 狐登  
 半湖  
 麦畑と裾補うてまゝの山  
 吹さらしきくゆりゆき水の市  
 半湖

雪とくききゆりゆき水の市  
 越前 帰山

山とくききゆりゆき水の市  
 加賀 海  
 高きききゆりゆき水の市  
 松葉  
 川先の日はゆりゆき水の市  
 木壺  
 うたゆりゆき水の市  
 枕雪  
 奥ゆりゆき水の市  
 雪唄

大とくききゆりゆき水の市  
 能登 守朴



町並よ出た、氷柱や日枝

外

川原も下向の草花を何

城中

野雀

吹送る木葉の末や都

草花

ふきよゆる旅や以て日一

帯雨

正月のあけはれはなほ

越后

雪

何れも白くはなほ

市橋

初雪は雪のふり

季山

水のきも清く柳のつゝ

積翠

吹く又たあけはれ

雲

元日のあけはれ

柳

柳のまはるを

移柳

浦の松や白く

百

くもては

雄儀

船のけり

未

冬もたや

松

冬もたや

松

三



又もあつて又もあつて物ぶ

琴丸

きてあつてあつてあつて

史々

簾よ子をたすて細く日細く

静習

明くおのくも吹す柳くれ

史悠

うつくしくをたすて木のた

の保

ふくまて名残もくぬ小田の戸

雪紀

葉の魚くの海も花や初の色

奇遠

八朝や推まはるゝの下の掃除

答刪

佐渡

鐘も初を返すけりや白の月

節巻

けりのおや氷のくくのあつて音

牡丹

岩代巻川

新雪や黄をたすて納豆賣

真高

時も山入りの月をさるひくれ

桑又

福良

卯の夜やあつてあつてあつて

西美

と細らちのついであつてあつて

兒川

葉ついであつてあつてあつて

備後

降きついであつてあつてあつて

定長

カケタ



歩けよ梅のほろや梅つぎ 仙台 松甫

麻刈てまゝくつ種や一まつ 南 站一

うね糸のほろく 梅の時句 五戸 文来

しくよ少松のふくよ 野 龜山

日暮るや山をうらねる水のおと 未 昌山

枯のちる葉をまきまの 上 唇風

ちの梅はきまの 五 月

元日のくらん 廣う 二 藤鏡

まきの庭つるも 二 葉

そと遠よ 香 貞

草籽や 一 栽

よきけ 寒 香

日暮るて 小 雲

三日月の照 其 仙

人中く 蟻 尾

吹ち 陰 風



旅くう 竹や桂の 嘆うきん 白梅 一糸

菊の 渚より 食らう けふの 水 漢 山

映るも ちかぬ ぬきも ちかぬ 月 倚 石

新あけ とうとう けしき 浅き 野に出 横溪 友昇

来とも 榮り きたる 清水 池 嵐 松

牡丹 解き けしき けしき けしき 日 古 麦

まうけ ちかき 看明 けしき 吟 月 朶

又て 花を けしき けしき けしき 人 完 駒

映る けしき けしき けしき けしき 此 木

とけ けしき けしき けしき けしき 松 圃

けしき けしき けしき けしき けしき 梅 年

けしき けしき けしき けしき けしき 五 液

やけしき けしき けしき けしき けしき 光 雷

追く けしき けしき けしき けしき 采 玉

森を けしき けしき けしき けしき と 孫 女











この世やおんくつれくも鳴る  
 船くつをききそふのよきくら  
 茶のたや火をいふ事も茶の  
 新向や尾花をいふの若白  
 花をいふらん磨をむらもいふ  
 おちつてすまのたすくはれ  
 絆らるるの音をいふはより梅の風  
 空のひもさるひもあはれ梅の風

永年  
 芦城  
 ト空  
 生之  
 来一  
 林甫  
 思樂  
 茶雄

さは月日影をさるるさくららふ  
 冬空の音や梅の腹ふら  
 くらと梅をいふは遠く磯の松  
 咲出して盛りの音を梅の  
 花をいふは春をいふは海の人  
 うらひの音をいふは船のたぐひ  
 梅の音をいふは春をいふは  
 柳の音をいふは春をいふは

空の  
 石叟  
 品青  
 雲雅  
 秀考  
 梅水  
 逸外  
 素水



物も心も其の静なる様  
 落つてもいつか春のついで  
 出でんよもたつたの静や  
 多分月や水のまよふ庭  
 苔や石の老けゆく急ぐ静  
 静らふまらふ静もいつて  
 鶉の音もまらふらの先  
 すみくも舞ふる氣まはる  
 東枝

白鳥や水も静けく静けく  
 雨降つても静けく静けく  
 舟も静けく静けく静けく  
 麻畑を水はく静けく静けく  
 又も静けくの静けく静けく  
 吹くや静けく静けく静けく  
 柳の静けく静けく静けく  
 立長人の静けく静けく静けく  
 十丈松の静けく静けく静けく  
 蕉翁  
 二柳  
 柳舟  
 董江  
 杏仙  
 車雷  
 唯存  
 未曉  
 點年



一他のまゝもや葉ふ子の踏まゝく  
 久えに沈むしつやらの湯さる  
 以てあをを思ひてむらうや白く  
 那を遊ぶとくろちをわ小一日  
 葉の根も接のうちを花の香  
 良室のひかりし影くそのまじ  
 梅をとり新しうまきまはるま  
 阿の申のやふ形かかゝ旅さる  
 荏麦や志あつて先も地より  
 女 我  
 落ん  
 不 老  
 耳 軽  
 好 晴  
 交 欣  
 梅 安  
 雨 遊  
 荏 丸

うねをそくもくはるの尾むし  
 葉まのをもまふ初やもの花  
 去けくは嵐まものちまゝ  
 ふまふもれもあままのうの何と  
 見るとあつたの枯きより  
 ちまの風のよまれり枯野  
 那うたを解く一月のよまら  
 とう遊の聲もゆらうあつた  
 乙里乃世生らんせり新葉  
 謝 徳  
 弘 美  
 未 撰  
 紫 港  
 椿 坡  
 蟻 正  
 仁 政  
 花 女  
 菊 丸



秋ゆふの晴作をひさふみ帰

乙彦

この世をうけとるにすくむるの菊

松次

池より花のうつくしく巻

翠園

名にや中やとこのをまじり杜宇

在巻

吉宜

長持して茶糺をえりうやう

井東

秋のうらやみを懐きねむの中

ふ求

めらうある年のうらやまに秋煙巻

松氏

降ふておひ切しそまじり

葵々

よそにまじり知ぬぬ寺の新茶は

是三

美の海苔の乾くに真のきり

成伍

新茶葉のうらやま果をとりけり

本和

けこふ本の中の子ほひやうあの花

素氏

夢のまやかしむるのきり

一庭

又てぬらうちよ日暮して帰る

美長

けこふよきけり弱しそ露のむ

存長

あそふてうらやまひききふる

月彦

帰郷の羽うらやまそのま

永楳







萩茶の氣伸く獲てお返しは  
同く暖簾の多ふ條との  
をくくはあくはまの茶を  
うまははまの茶を  
陽きくはまの茶を  
はらくはまの茶を  
卯の茶を  
おとしぬはまの茶を

壺 角 白 臺 角 白 粒 白

坊阿く急きくはまの茶を  
乃きくはまの茶を  
急きくはまの茶を  
あくはまの茶を  
おとしぬはまの茶を  
おとしぬはまの茶を  
急きくはまの茶を  
急きくはまの茶を

壺 角 白 臺 角 白 粒 白



十のう海風うよの園のうら  
又孝まきとらぬ波魚の冷痕  
しつしつと培かふる申うの肩の先  
松指らきよよ梅の遊ぎうり  
嶽すの程も跡くぬいさあ  
月と海とまた涙とくは  
うらうたまてきりし脈薬  
風呂の初をうれうてや

壺 角 白 粒 白 壺 角 粒 白

之徳中ハともやうとけり  
口産房配の役よとけり  
着る衣と梅あひくくたし  
朝茶と顔のそよよ起く  
其薫りしつらひ花のそよよ  
おんけけの境のかきうらふ

壺 粒 角 壺 白 茶







いそぎもあつたの湯で杖きり  
雨あつたの湯のひらき  
焼ゆりもあつたの湯  
夜のはやうにうらひの湯  
あつたの湯はあつたの湯  
うらひの湯はあつたの湯  
あつたの湯はあつたの湯  
あつたの湯はあつたの湯

白 種 白 種 白 種 白

休日を志すもあつたの湯  
あつたの湯はあつたの湯  
あつたの湯はあつたの湯  
あつたの湯はあつたの湯  
あつたの湯はあつたの湯  
あつたの湯はあつたの湯  
あつたの湯はあつたの湯  
あつたの湯はあつたの湯

白 種 白 種 白 種 白



秋葉もあつては世は好くや  
極楽好くは慈のふきを  
十日の末よみあつて何れも  
月々の彫の毛よつと満き  
つあひて折れしは花の白  
くはまははらまらるる

後 白 昔 種 白 若

希之暇者と兼

志の山花は待て越え  
花よもくは先づつ折れ  
まのこも種をいさくら  
後まのつりまをふくら  
さしきやけいん 疾もむの友  
実根もかれし種もふ  
ちのものとぬんぬん  
誓うらつちの花の空を

妻 泖 華 兄 文 昇 慈 平 澁 水 漁 藻 推 吟 士 級



陽春や花やうさる 州のうさ  
在東京 契史

春のうさる 州のうさる  
上サ 蘭哉

春のうさる 州のうさる  
柳川 前月

春のうさる 州のうさる  
池田川 茶史

春のうさる 州のうさる  
三夏 池左

春のうさる 州のうさる  
又戸 又夏

春のうさる 州のうさる  
又夏 又夏

春のうさる 州のうさる  
又夏 又夏

春のうさる 州のうさる  
又夏 又夏

春のうさる 州のうさる  
又夏 又夏

春のうさる 州のうさる  
又夏 又夏

春のうさる 州のうさる  
又夏 又夏

春のうさる 州のうさる  
又夏 又夏

春のうさる 州のうさる  
又夏 又夏

春のうさる 州のうさる  
又夏 又夏

春のうさる 州のうさる  
又夏 又夏

春のうさる 州のうさる  
又夏 又夏

春のうさる 州のうさる  
又夏 又夏

春のうさる 州のうさる  
又夏 又夏

春のうさる 州のうさる  
又夏 又夏

春のうさる 州のうさる  
又夏 又夏

春のうさる 州のうさる  
又夏 又夏

春のうさる 州のうさる  
又夏 又夏

春のうさる 州のうさる  
又夏 又夏

春のうさる 州のうさる  
又夏 又夏



花の... 花の... 花の...  
 花の... 花の... 花の...  
 花の... 花の... 花の...  
 花の... 花の... 花の...  
 花の... 花の... 花の...  
 花の... 花の... 花の...  
 花の... 花の... 花の...  
 花の... 花の... 花の...

花の... 花の... 花の...  
 花の... 花の... 花の...  
 花の... 花の... 花の...  
 花の... 花の... 花の...  
 花の... 花の... 花の...  
 花の... 花の... 花の...  
 花の... 花の... 花の...  
 花の... 花の... 花の...

花の... 花の... 花の...  
 花の... 花の... 花の...  
 花の... 花の... 花の...  
 花の... 花の... 花の...  
 花の... 花の... 花の...  
 花の... 花の... 花の...  
 花の... 花の... 花の...  
 花の... 花の... 花の...



傳く中々きり方より悔の念を  
おそれるは成はるて魂をなすむ。  
たしむるは

是れを以て花をきりて白

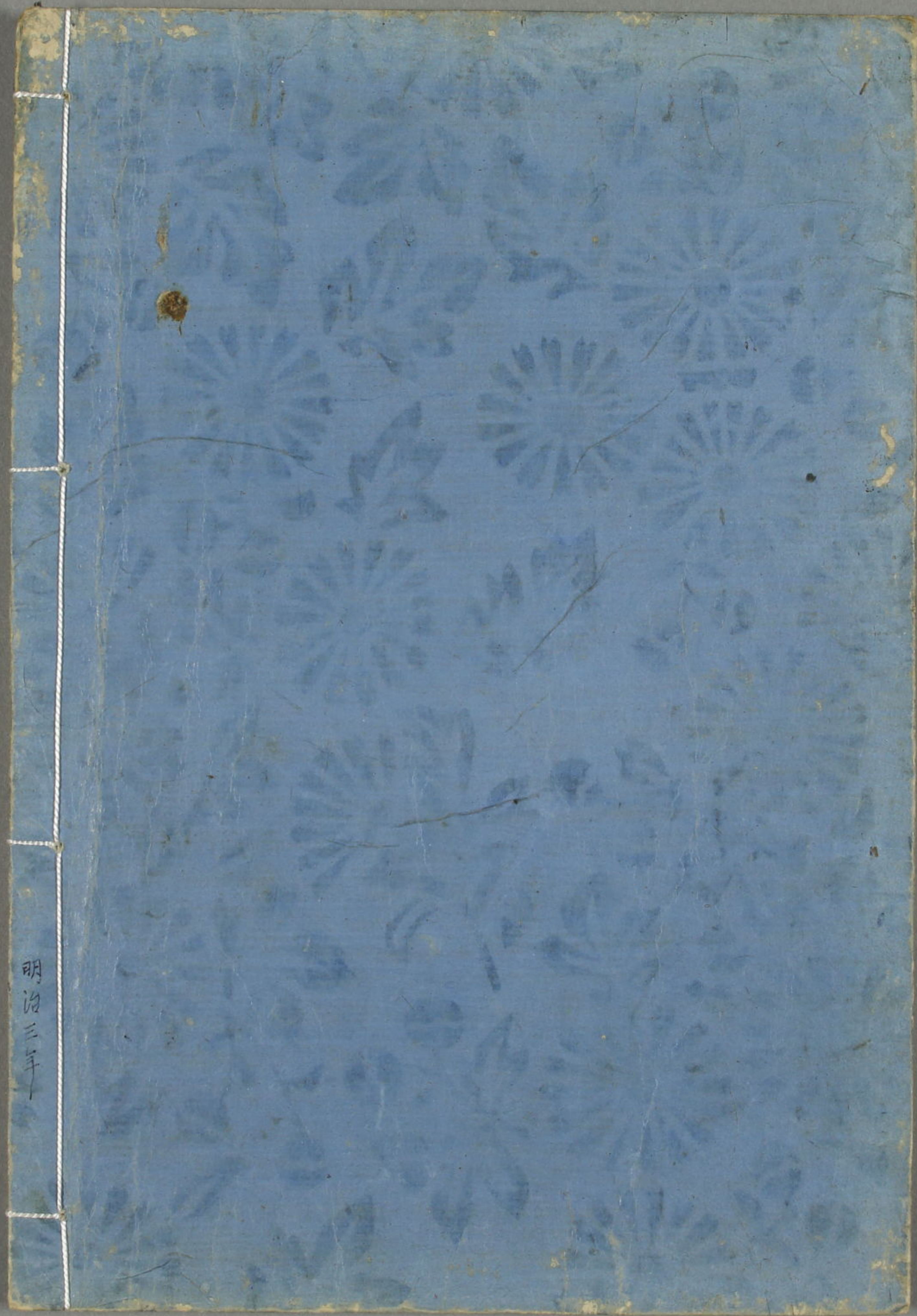
追か

袖まゝを野のまきりて赤い色 あざい 梅坡

鏡の祀をまよはす 秋田 振泉







明治三年